



鳥 3 (11) 1921 年より転載

初代会頭 飯島 魁 IIJIMA Isao

1861 (文久元年) - 1921 (大正 10). 会頭在任期間 1912 - 21

唐沢孝一 (都市鳥研究会)

1861 年 三河浜松藩 (現・静岡県浜松市) に生まれる。幕末から明治へ、近代化を急ぐ明治政府は 1877 (明治 10) 年に東京大学を創設するなど、欧米の自然科学の日本導入を急ピッチで進める中、飯島は 1878 年に東京大学に入学。在学中は外国人教師のモースやホイットマンらの指導を受け、1881 年に東大理学部動物学科の第一回卒業生 (3 名) の一人となる。卒業後、日本初の動物学研究生としてドイツ・ライプチヒ大学に 3 年間留学。1886 年に帰国、25 歳で帝国大学動物学科教授となり、黎明期の日本における動物学の先駆的・草分け的な存在となる。魚類、海綿、寄生虫、鳥類など、動物学への関心は幅広いものがあり、1903 年、堺水族館の設立・管理に携わり、1904 年帝国大学三崎臨海実験所所長となるなど、日本における水族館の発展に貢献した。また、著書の『人体寄生動物編』(1888) は日本寄生虫学の発展に貢献するところ大であった。飯島は広節裂頭条虫の感染経路の解明のために自ら幼虫を試食して解明につとめたというエピソードが残っている。加えて明治・大正期の動物学の集大成とも言われる『動物学提要』(1918) は、動物学の基礎を築いた名著として多くの動物学徒の学ぶところとなった。

一方、飯島は 1912 年 5 月、日本鳥学会を創設。初代会頭をつとめ、近代日本の鳥学の黎明を告げる輝かしい一歩をスタートさせた。いわば日本における近代鳥類学の礎を築いた人物である。学会創設への意気込みはいや高く、1915 年創刊の学会誌「鳥」の巻頭言「本邦鳥類ノ研究ニ就キテ」で鳥学の近代化に関して下記の見解を表明している。

従来のがわが国の鳥類は本草学者による細密な観察はあるものの、真に科学的な研究とは言い難いと指摘して上で、シーボルトやテミンク、ブラキストン等の諸学者による分類学研究を評価しつつも、今後の学会の方向性として「生態学的研究」および「応用鳥学的研究」の重要性を強調し、次

のように述べている。「何レノ国ニ於テモ斯学発達ノ跡を尋ヌルニ、先ヅ基礎的知識タル分類学ノ方面ガ開拓セラレ、次デ生態学・応用鳥学ト云フ順ニ進ンデ行ノデアッテ、即我国ノ状態ハ目下ソノ過渡時代ニアルノデアル。右ノ次第故、今後我国ノ鳥学ハ是非共此生態学的方面並ニ応用的方面ニ向テ大ニ発展ノ必要ヲ認ムルノデアル」

さらに、生態学的研究の手法についても言及し、フィールドでの観察を重視し、かつ地方在住の研究者 (同好の有志) の役割に関して、「鳥類生態方面ノ研究ト云フモノハ多クハ机上若クハ実験室内ニ於ケルヨリハ、反ツテ日常野外ノ観察ニヨッテ貴重ナル結果ヲ得ラレルノデアル。即地方在住ノ同好者諸君ガ此問題ノ解決ニ向テ最適当ナル位置ニアルモノデアル」と述べている。「地方在住ノ同好者諸君」の役割に関しては、三代会頭内田清之助による全国鳥獣調査事業 (1924 - 1943) に引き継がれ、各地の会員や研究者からの情報収集が鳥学の発展をもたらした。地方研究者の育成と学会参加促進に貢献することになる。さらに調査テーマの具体的事例として「候鳥ノ去来ニ関スル観察」「繁殖ニ関スル観察」「分布ニ関スル調査」「鳥類食性の調査」を取り上げ、その科学的調査が鳥学の発展に貢献するのみならず、鳥類保護・増殖を計る上でも重要であり「応用鳥学上必要ナル研究デアル」と指摘、鳥学の 100 年先を見据えた先見性は高く評価されよう。

飯島を直接知らぬ世代でも、和名イイジマムシクイ (飯島虫喰 *Phylloscopus ijimae*) の名を知らぬ者はおるまい。種小名 *ijimae* は、飯島への献名である。大正 9 年叙勲一等。職歴、主要論文は学会誌「鳥」3 (11) 1921 「会頭飯島先生を悼む」に詳しい。1921 (大正 10) 年 3 月 14 日、東京帝国大学教授の現職 (59 歳 9 ヶ月) でこの世を去った。